

# 富士市・Power Up Fuji わかもの意識調査 の結果を読む

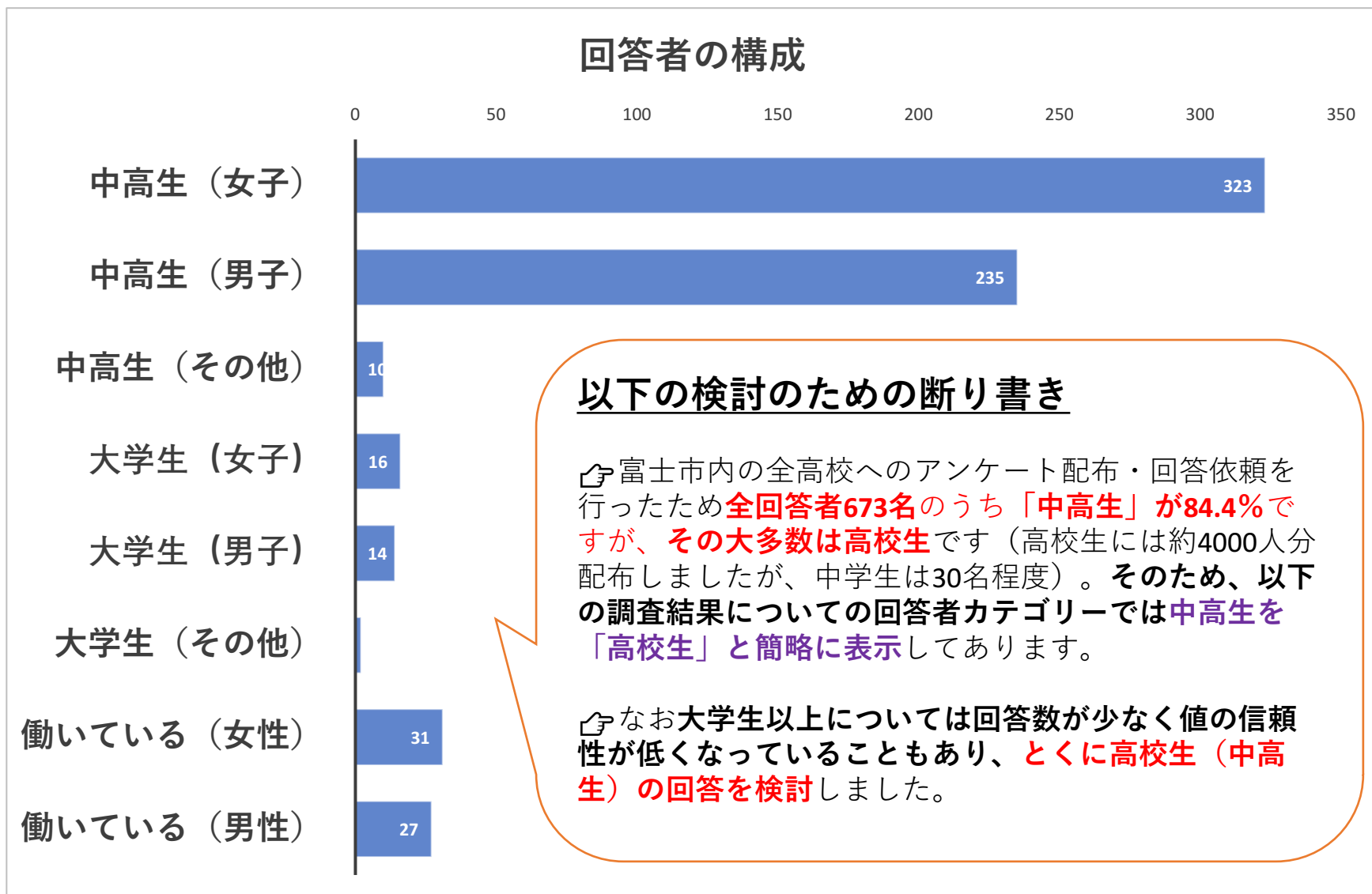
静岡大学・人文社会科学部

荻野 達史

# アンケート調査の概要

- 実施主体 富士市 市民部多文化・男女共同参画課  
およびPower Up Fuji(略称PUF)
- 実施期間 令和2年9月～10月
- 主旨 『令和2年度チャレンジセミナー ～女性や若者ととともにすすめるこれからのまちづくり～』
  - 「少子高齢化が進む中、**地域活動などの社会活動に「わかもの」の力が必要不可欠**となってきました。コロナ禍、入試改革など大きく変化する社会の中で生きる {わかもの} のニーズを知り、**地域の色々な社会活動に参画しやすい環境をつくるために**」実施
- 内容 所属・性別などから市民活動経験などに関する全15項目からなるアンケート

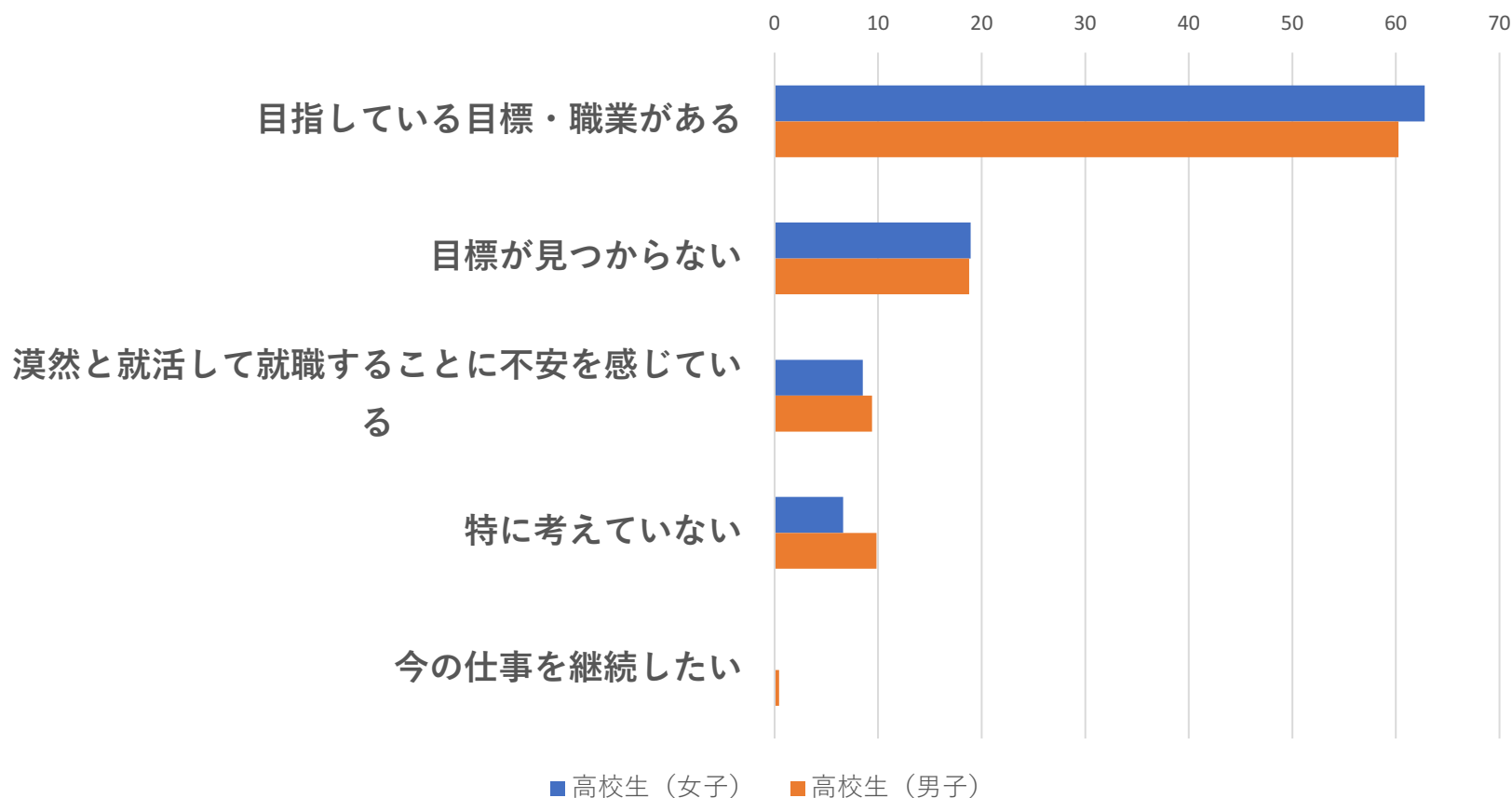
# 回答者の構成と検討対象



# たとえばこのような結果も

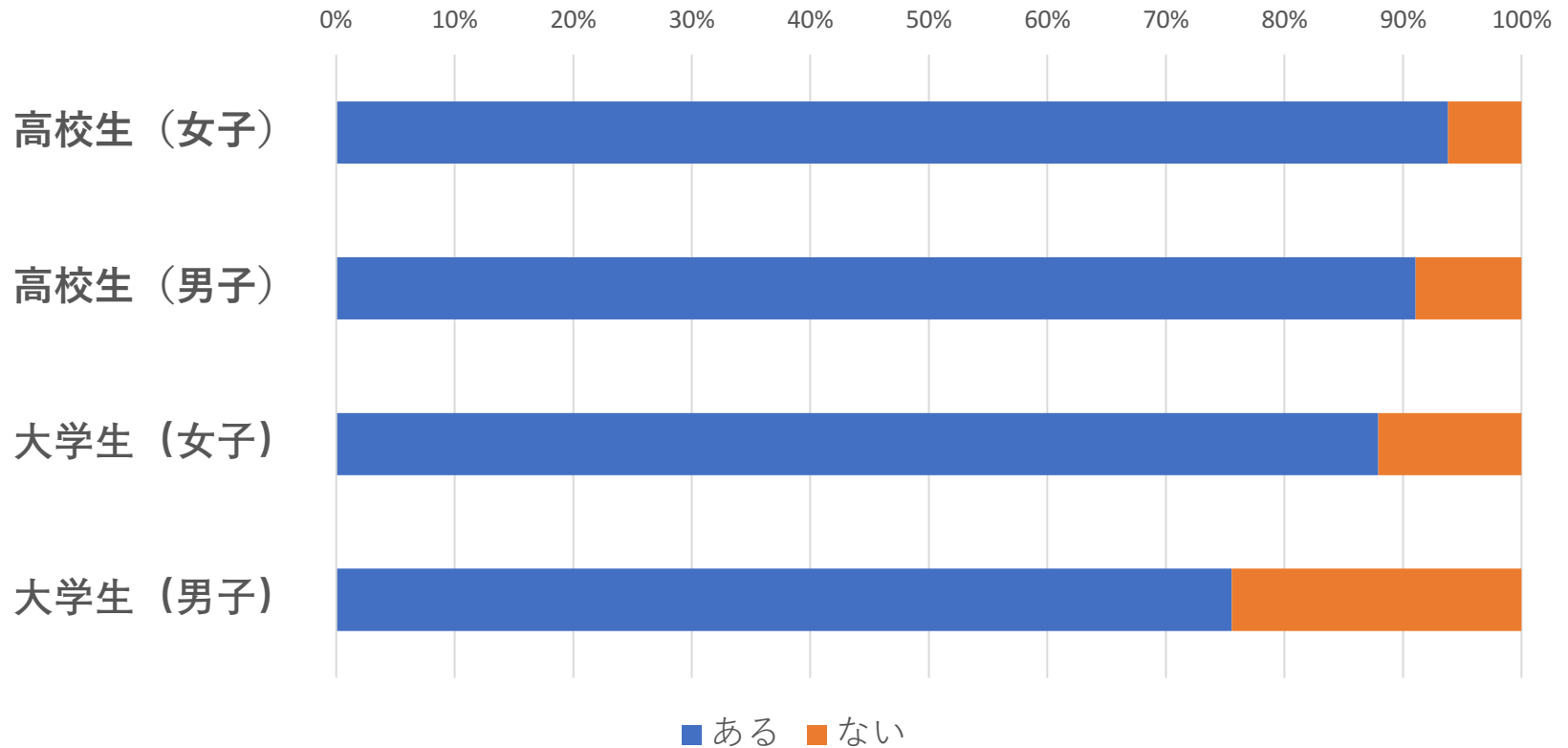
問5 将来についてどんなイメージでいますか？

問5 将来のイメージは？



# それでは「社会活動」について まずは「参加経験」から

問8 社会活動への参加経験は？

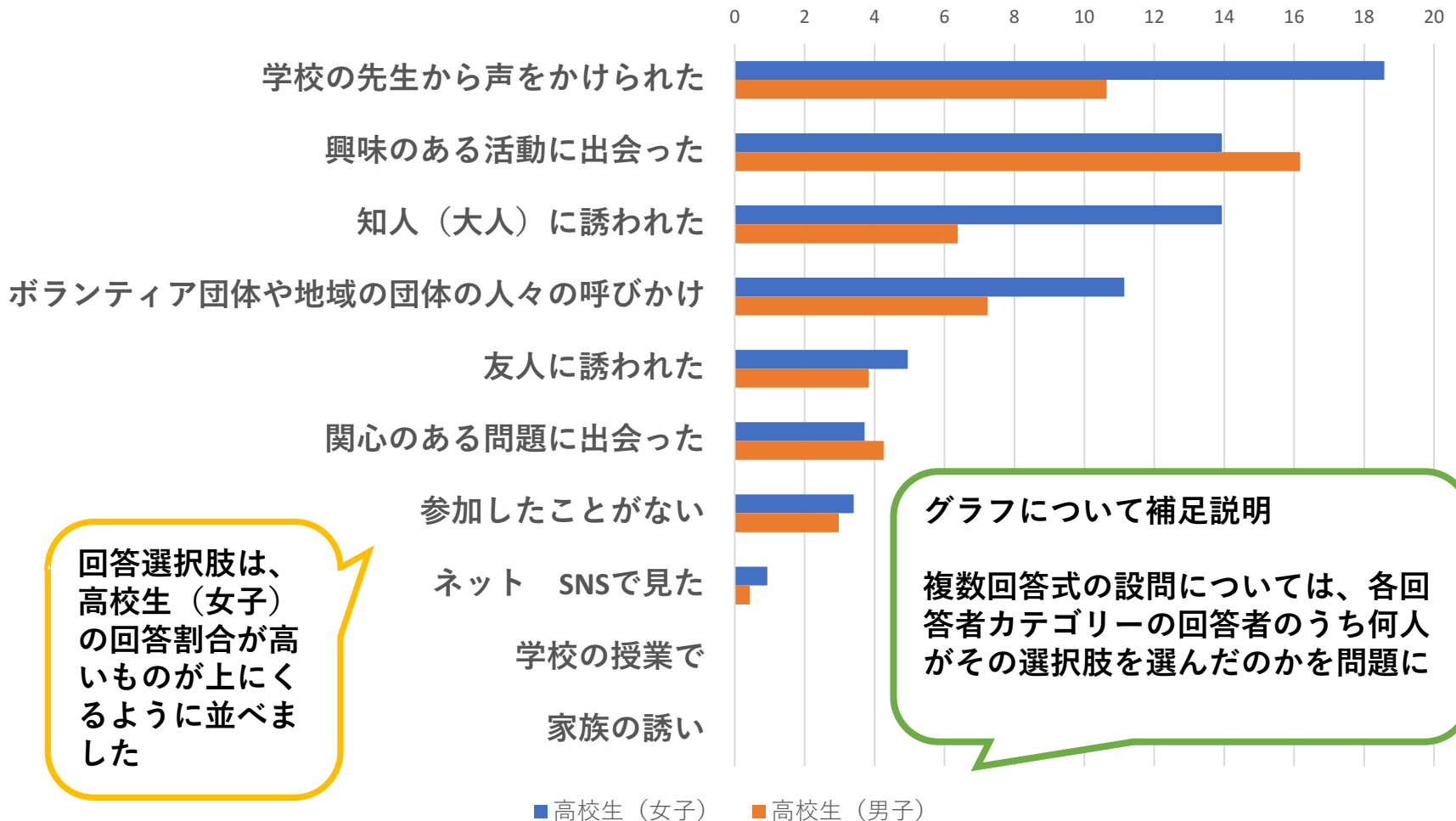


# 参加経験についてのコメント

- とくに高校生では男女ともに**90%以上**と大半が参加経たしたことがあるという結果に
- 質問文には「（防災訓練等を含む）」という記述も含まれていたため、こうした高い値になった可能性もあります
  - ただし、高校生（ごく一部中学生あり）について「回収率」（**4000**程度チラシ配布して**550~560**名程度が回答）は**15%**程度で、回答した高校生はもとより「社会活動」などに関心の高い層出会った可能性もあります

# 社会活動へ参加した 「きっかけ」はなんですか？

問9 参加のきっかけは？



回答選択肢は、  
高校生（女子）  
の回答割合が高  
いものが上にく  
るように並べま  
した

グラフについて補足説明

複数回答式の設問については、各回  
答者カテゴリーの回答者のうち何人  
がその選択肢を選んだのかを問題に

# 「きっかけ」についてのコメント 回答者数の多い高校生に注目して

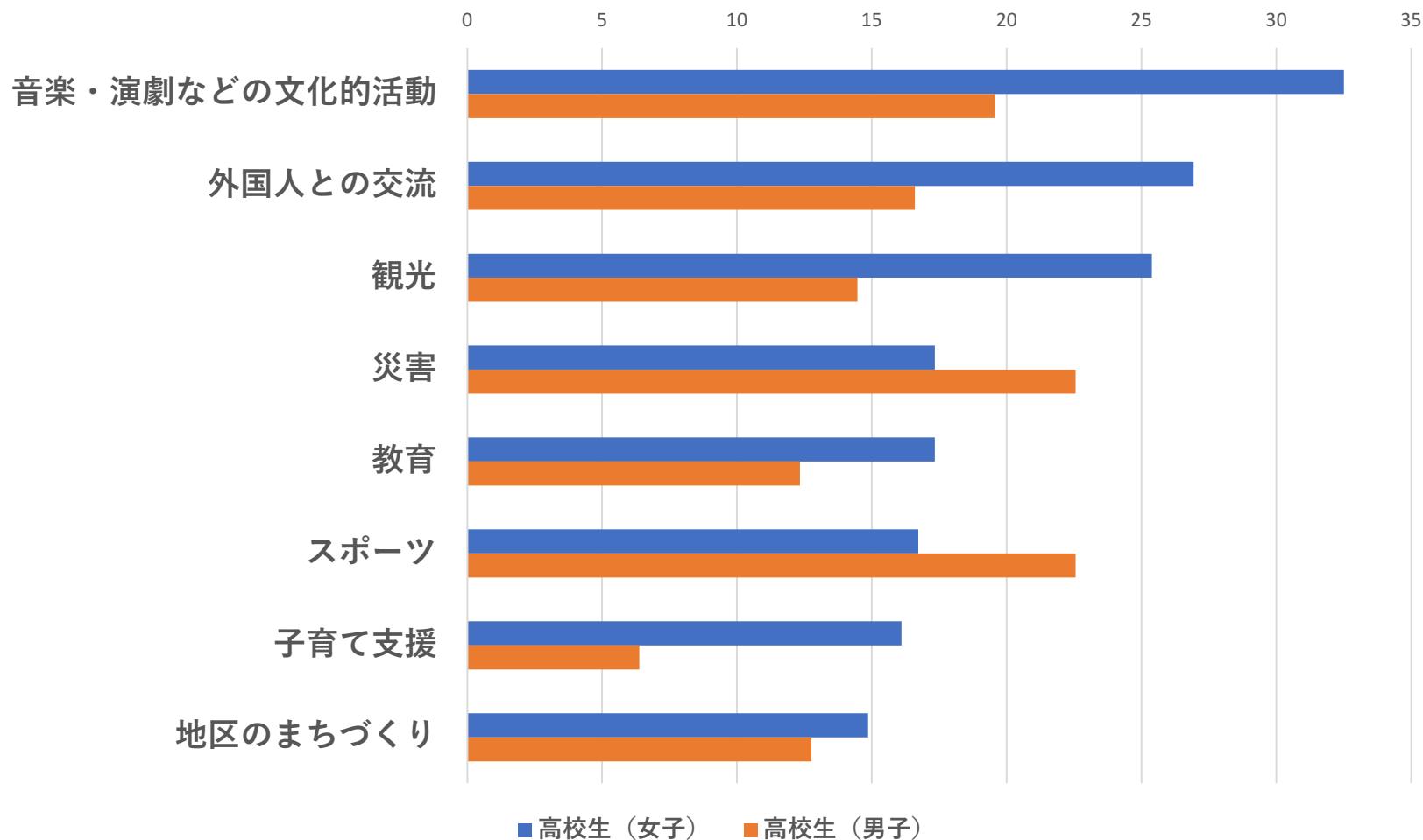
- まず、実際に誰かから「誘われた」り、「呼びかけ」られたりすることが相対的にみて高い値に
  - ネット、SNSは数%にもみたくない結果
  - 可能性としては、誘う側がネット上で発信をしていないか、高校生が社会活動をネット上で探すといったことがないか、その両方か？
- 「興味ある活動に出会った」も**15%**程度と比較的高い値になっている
  - 実際の呼びかけや誘いがあることと同時に、興味や関心を既に持っていること、あるいは呼びかけのなかで興味を持てる説明がなされることもやはり重要ということになりそうです



# どんな分野の活動に興味がありますか？

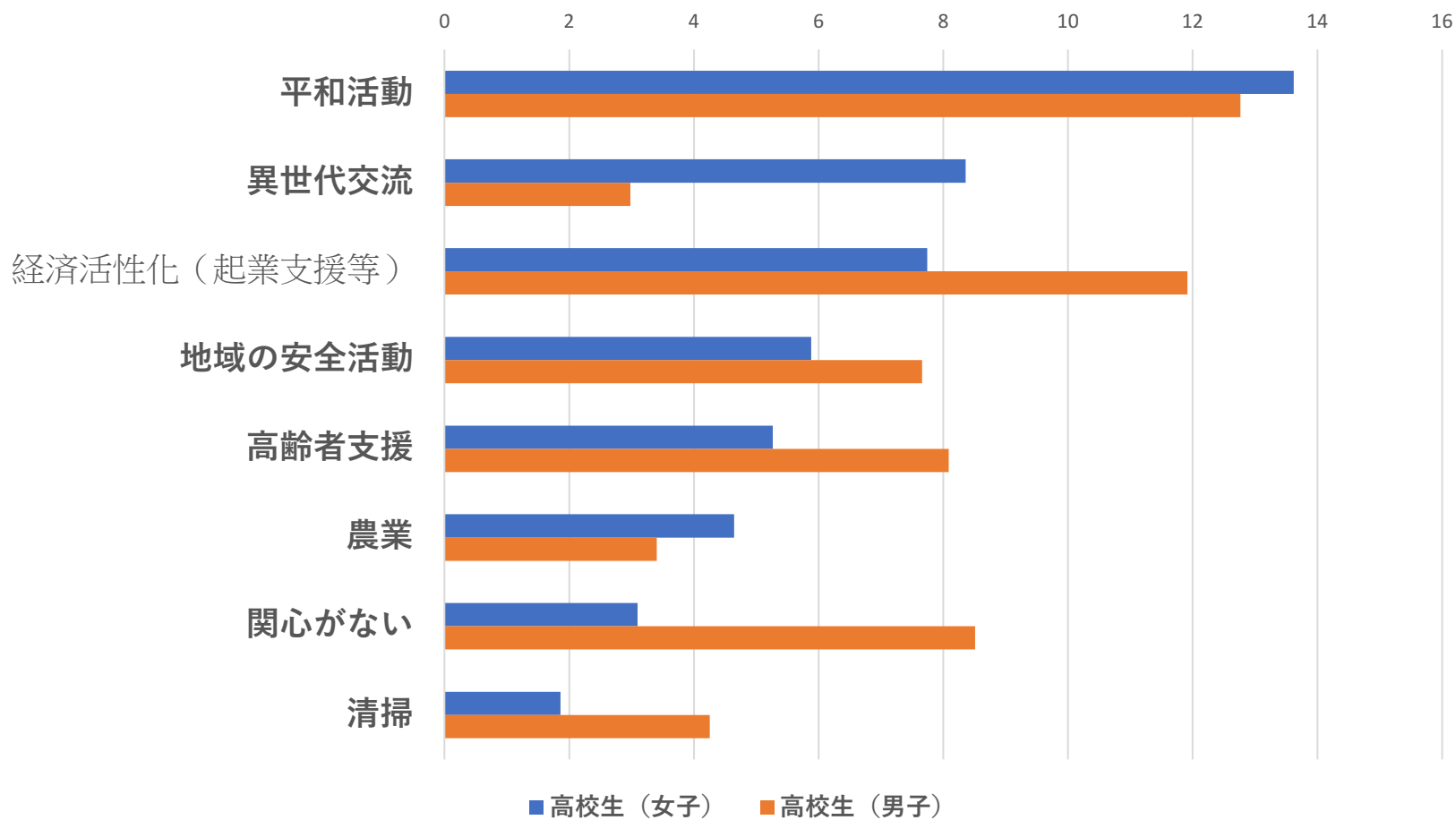
グラフは選択率が高い順で①②に分割

問11①どんな分野の活動に関心が？



# つづき

問11②どんな分野の活動に関心が？



# 興味のある分野 高校生男女別順位(10位まで)

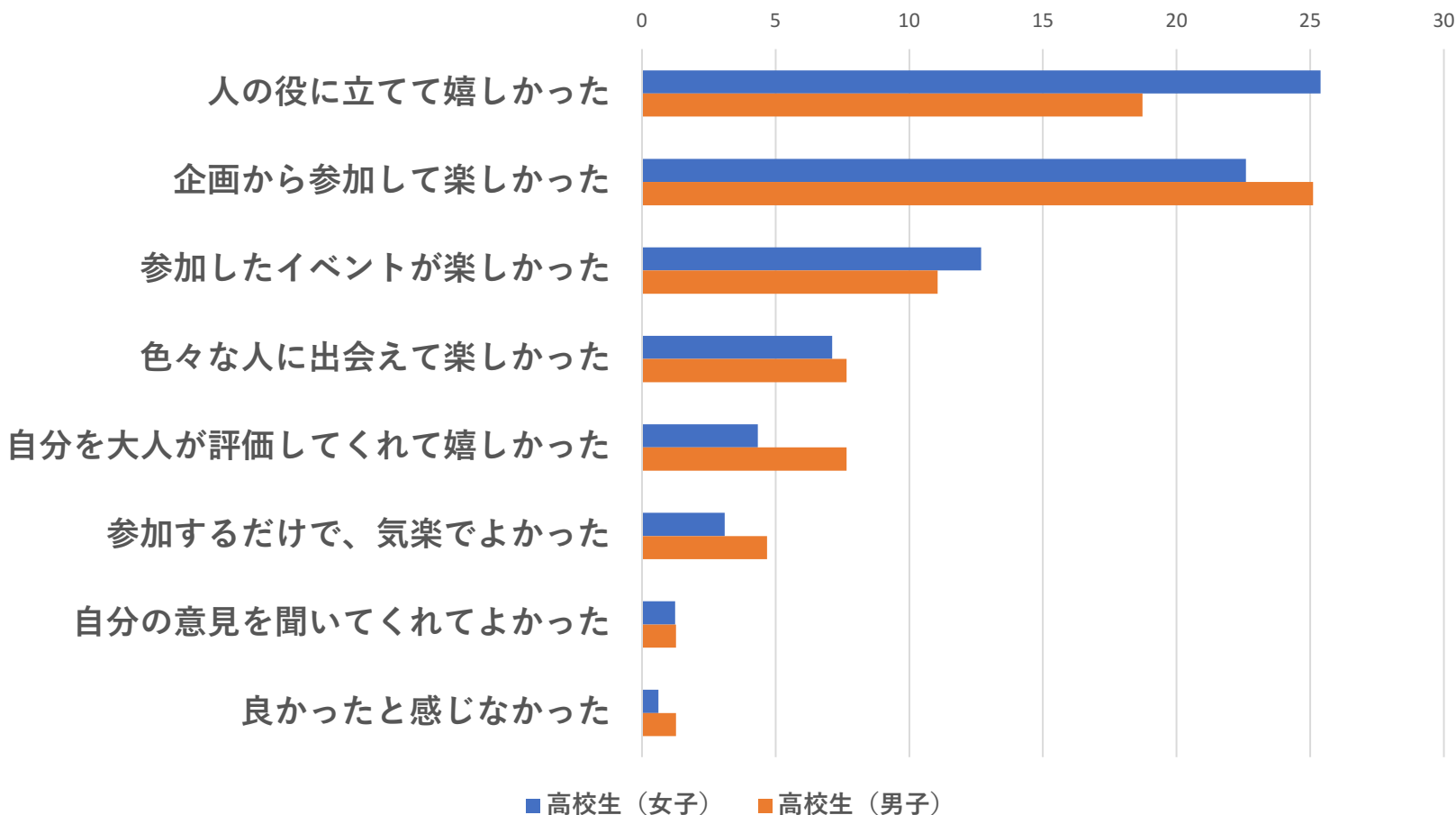
関心分野についての男女の違いもありますが、概して女子の方が多く関心を持っていることも明らかに

	高校生（女子）	高校生（男子）
1位	音楽・演劇などの文化的活動	災害
2位	外国人との交流	スポーツ
3位	観光	音楽・演劇などの文化的活動
4位	災害	外国人との交流
5位	教育	観光
6位	スポーツ	地区のまちづくり
7位	子育て支援	平和活動
8位	地区のまちづくり	教育
9位	平和活動	経済活性化（起業支援等）
10位	異世代交流	関心がない
回答比率 総計値※	214.6	178.3

※「関心がない」の回答比率を除いた全選択肢回答比率の合計

# 社会活動に参加して 「良かった」と感じたことは？

問10 活動に参加してよかったのは？



# 「良かったこと」についてのコメント

- 「人の役に立てて嬉しかった」と「企画から運営に参加出来て、やりがいがあり楽しかった」が相対的にみてかなり高い値に
- きわめて興味深い結果
  - ただ自分が楽しかった、褒められた、意見を聞いてもらえたといったことより、**参加して人の役に立てたという実感**があったことや、**自分から主体的に、そして責任もそれなりに感じながら参加できたこと**が「良かったこと」として認識されていると思われます
  - このことは**国際比較調査で日本の青年層が示す意識傾向から考えますと重要な問題**を含んでいると思われます
  - **かれらの潜在的な意識や良好な社会経験がもつ意味**について考えが及びます

# 参考資料) 日本の若者は「市民」 感覚がひどく低い傾向にある

表 1-2 自分自身についての 18 歳の意識

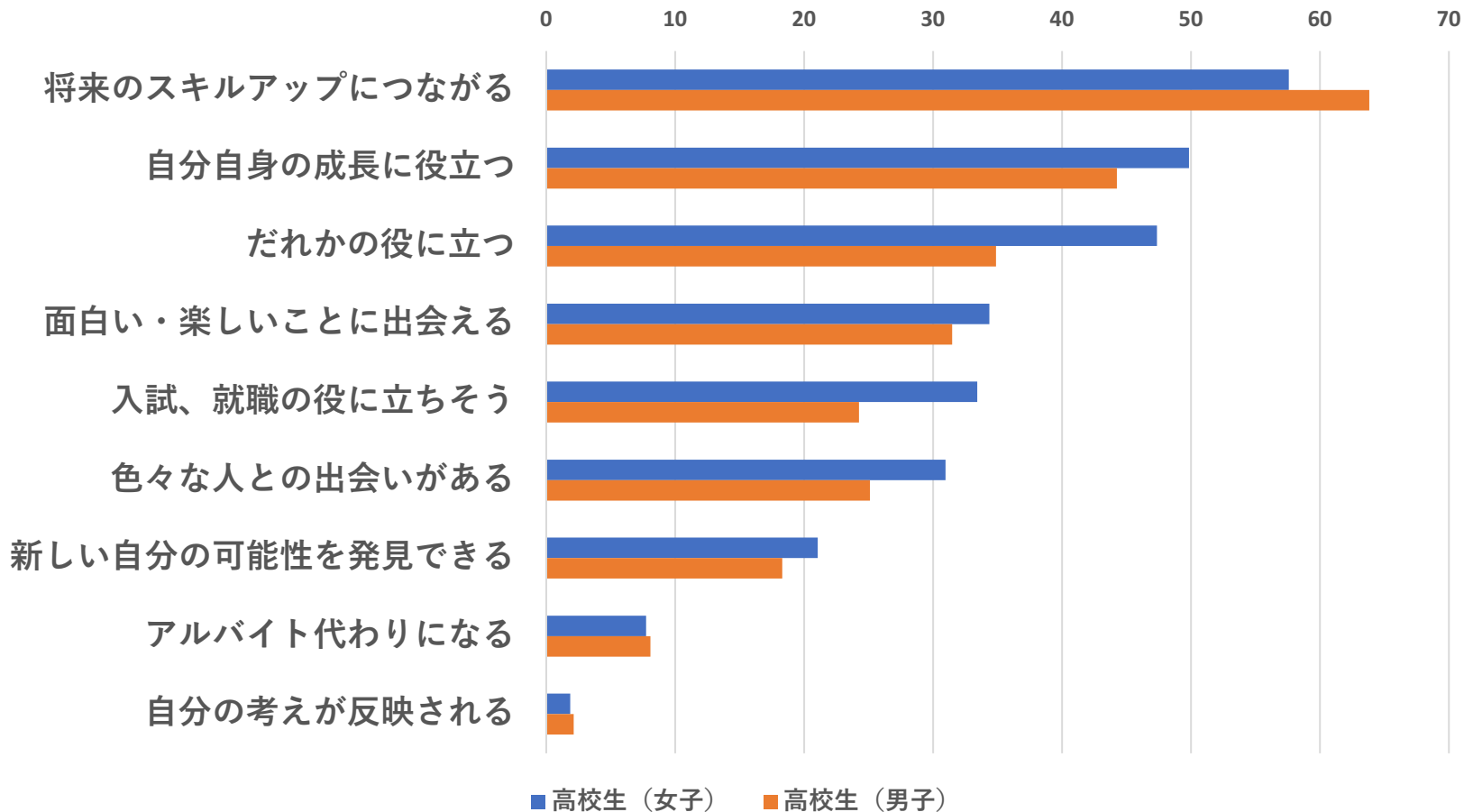
	自分を大人 だと思う	自分は責任 がある社会 の一員だと 思う	将来の夢を 持っている	自分で国や 社会を変え られると思う	自分の国に 解決したい 社会課題が ある	社会課題に ついて、家族 や友人など 周りの人と 積極的に議 論している
日本	29.1%	44.8%	60.1%	18.3%	46.4%	27.2%
インド	84.1%	92.0%	95.8%	83.4%	89.1%	83.8%
インドネシア	79.4%	88.0%	97.0%	68.2%	74.6%	79.1%
韓国	49.1%	74.6%	82.2%	39.6%	71.6%	55.0%
ベトナム	65.3%	84.8%	92.4%	47.6%	75.5%	75.3%
中国	89.9%	96.5%	96.0%	65.6%	73.4%	87.7%
イギリス	82.2%	89.8%	91.1%	50.7%	78.0%	74.5%
アメリカ	78.1%	88.6%	93.7%	65.7%	79.4%	68.4%
ドイツ	82.6%	83.4%	92.4%	45.9%	66.2%	73.1%

出典：日本財団「第 20 回 18 歳意識調査」テーマ：「社会や国に対する  
意識調査」要約版

本田(2020)より

# 社会活動への参加で「期待」 することは？

問12 社会活動への参加で期待することは？



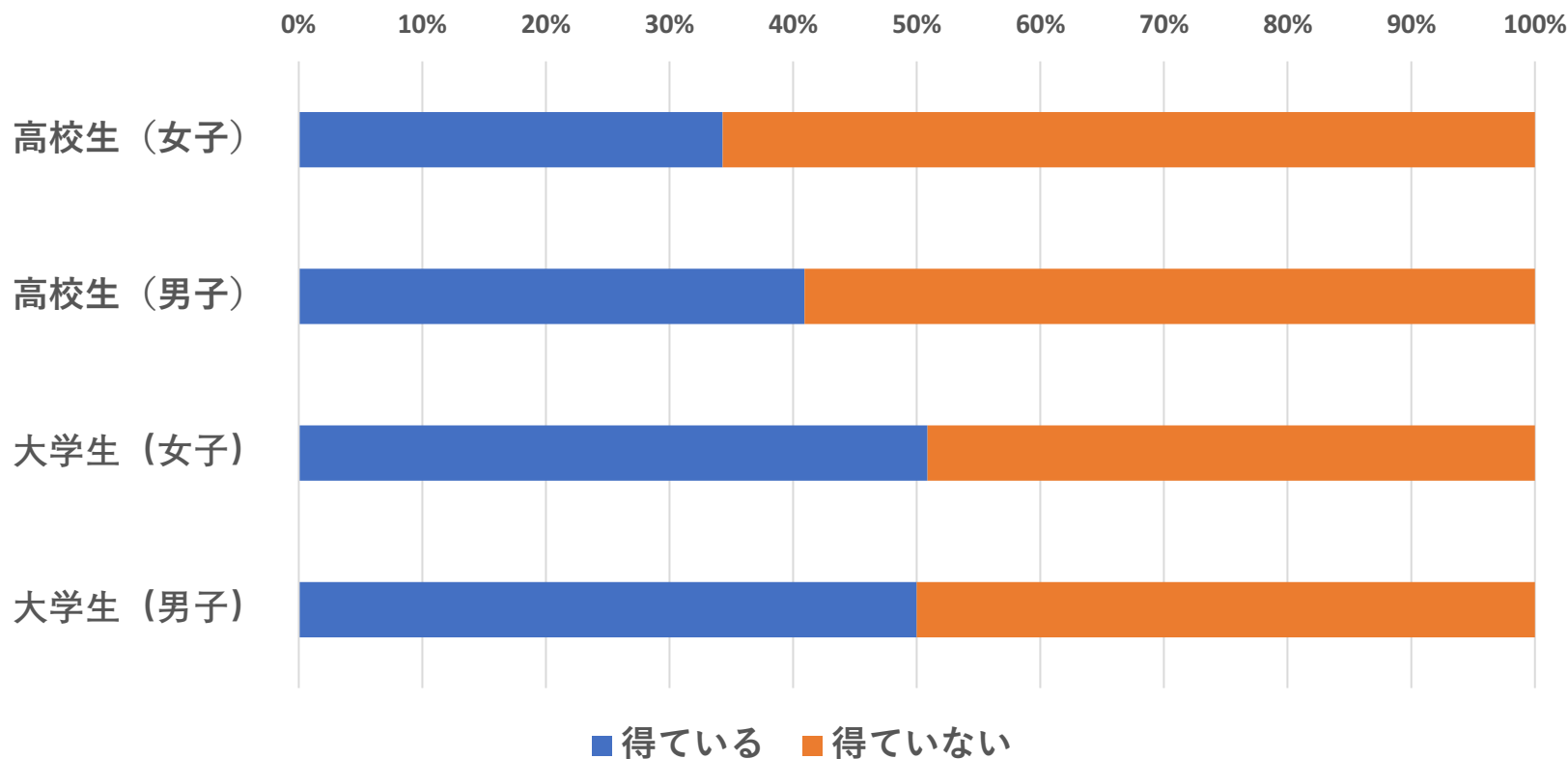
# 参加で「期待」することについて のコメント

- 全体期に女子の方が期待するもの大きい
- **「将来志向」が上位2つ**
  - 「将来のスキルアップ」（男女平均60%程度）
  - 「自分自身の成長に役立つ」（男女平均47%程度）
  - 参加して良かったことについて回答選択肢には含まれない項目でしたが、**何らかの意味で自分の「能力アップ」に繋がることを求められている**ようです
- 3番目に**「だれかの役に立つ」**
  - 男女差あり：女子48%程度、男子35%程度
- 呼びかける側に対しては
  - 中長期的に自分に資するであろう社会経験をしてみたいという欲求と、今ここで人の役に立ってみたいという欲求の両面に応えられることが求められていると言えそうです



# 社会活動が行われているかの情報を得ていますか？

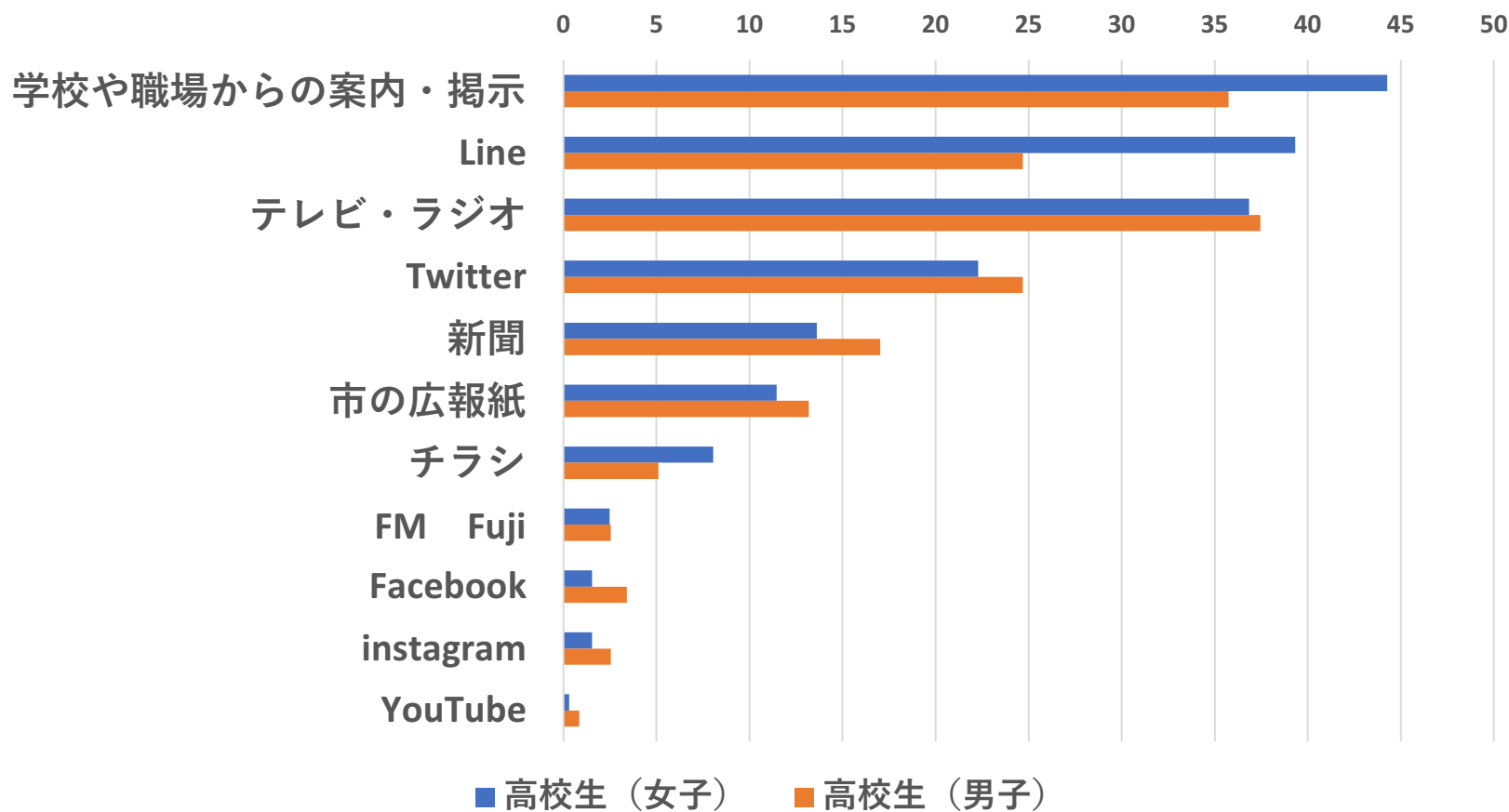
問13 社会活動についての情報を得ている



高校生については全体で40%弱。まだ増やせる余地は大きいといえそう

# どういう発信なら情報を受け取りやすいですか？

問14 どんな発信であれば受け取りやすい？



# 情報を受け取りやすいメディアについてのコメント

- **様々なメディアを組み合わせる必要**もありそう
  - 高校生の上位3つのメディアは①**学校での案内・掲示**、②**Line**（とくに女子、男子はTwitterと同程度）、③**テレビ・ラジオ**
  - 若者のテレビ離れはよく指摘されるが、必ずしも**web媒体ばかりが適当**とはいえません
- とはいえ、**LineとTwitter（男女平均でも20%を超える）は高い値**を示しています
  - **発信側が利用する余地は大きい**（「きっかけ」の回答では数%にも満たなかった）
  - ただし若者内での年齢層（高校生／大学生）による利用アプリの相違やアプリの流行り廃れにも注意が必要そう

補論

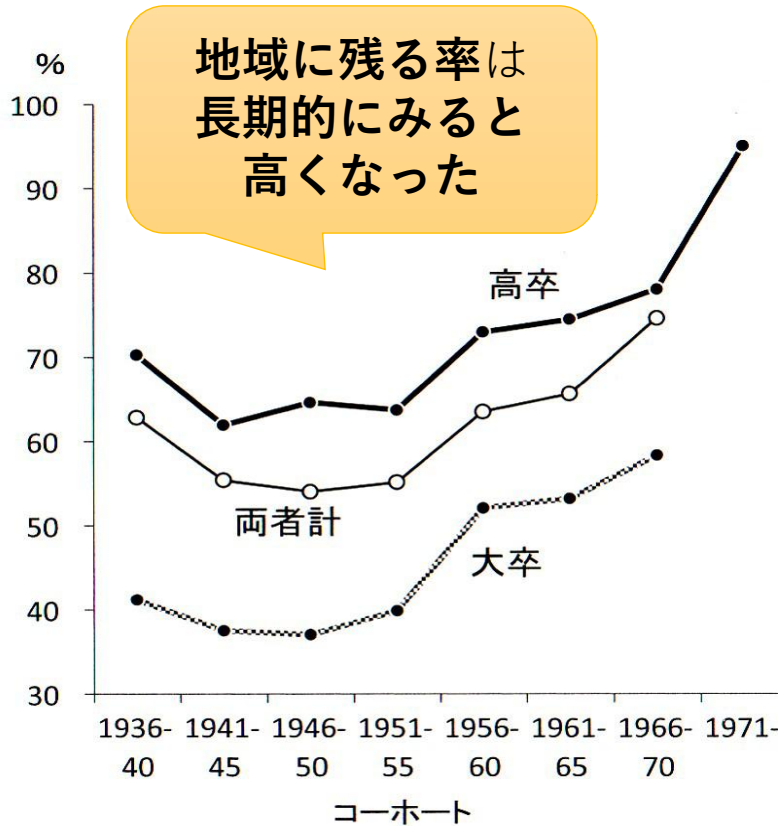
若者が働く場として  
地方を選ぶには？

# この問いの経緯から

- PUFメンバーの方々との打ち合わせから
  - 若者の地域・社会活動への参加ばかりでなく、
  - **働く場として地方を選ぶようになるためのヒント**にも強い関心ありと
- 若者が一定の割合で定住すること
  - 地域の存続・発展にとっての死活問題
- 幾つかの関連研究などから多少のお話を
  - 包括的な検討・改革が必要
    - 産業・労働政策
    - 公共部門の運営に係る方策
    - 若年層に対する社会保障政策
    - 地域文化

# 戦後の人口移動について 大きな趨勢から

文化・消費格  
差も小さく  
なってきた



残留率の増減を説明する強力な要因は都市と地方との**求人倍率の差** (対都市求人倍率比が大きくなれば残留率上昇)

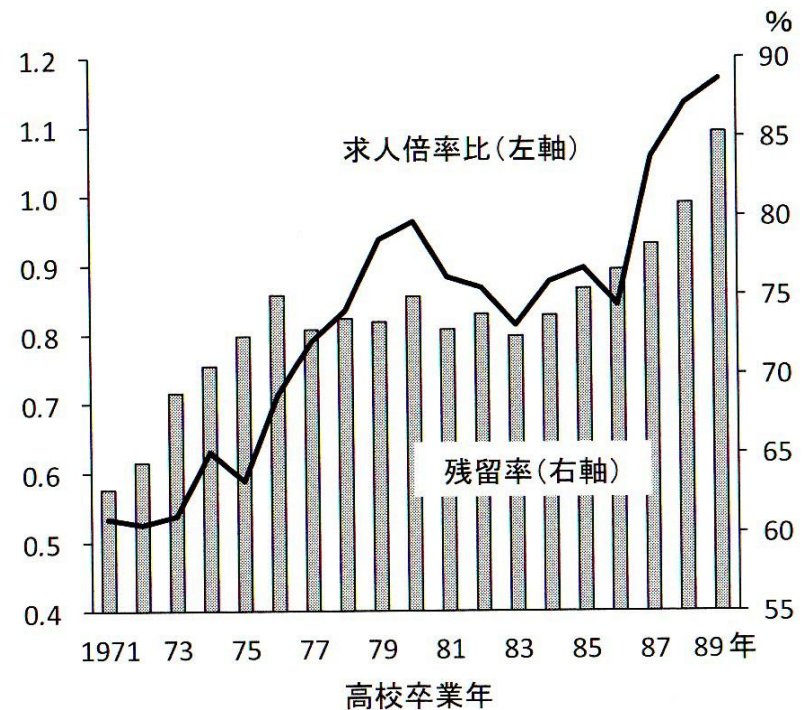


図 3-2 学歴別の出身地残留率

資料：「第3回人口移動調査」個票を再集計

山口(2018)より

図 3-6 地方圏の対大都市圏求人倍率比と出身地残留率 (1971年~89年)

資料：新規学卒者の労働市場 (労働省安定局) および「第3回人口移動調査」個票を再集計

# しかし...現在、転出増傾向強まる 静岡県の社会減について 2013年

	総数	男	女
総数	△ 6,892	△ 3,025	△ 3,867
0～4歳	△ 339	△ 192	△ 147
5～9歳	△ 490	△ 170	△ 320
10～14歳	△ 375	△ 190	△ 185
15～19歳	△ 1,768	△ 945	△ 823
20～24歳	△ 2,034	△ 468	△ 1,566
25～29歳	△ 349	△ 179	△ 170
30～34歳	△ 487	△ 314	△ 173
35～39歳	△ 470	△ 158	△ 312
40～44歳	△ 551	△ 309	△ 242
45～49歳	△ 328	△ 206	△ 122
50～54歳	△ 223	△ 185	△ 38

静岡県・人口問題に関する有識者会議(2014)より 単位：人

1990年代半ば以降、転出が転入を上回り2010年前後から転出超過規模がかなり大きくなった。年齢層別にみれば10代後半から20代前半の流出が顕著

# 市町における年齢層別転入超過数 2013年

	総数			0~14歳			15~64歳			65歳以上		
	総数	男性	女性	総数	男性	女性	総数	男性	女性	総数	男性	女性
沼津市	△ 1,239	△ 623	△ 616	△ 222	△ 101	△ 121	△ 1,009	△ 531	△ 478	△ 8	9	△ 17
三島市	△ 120	△ 75	△ 45	81	56	25	△ 221	△ 130	△ 91	20	△ 1	21
富士宮市	170	108	62	77	48	29	△ 20	11	△ 31	113	49	64
富士市	△ 610	△ 410	△ 200	△ 49	△ 64	15	△ 542	△ 336	△ 206	△ 19	△ 10	△ 9
御殿場市	△ 507	△ 270	△ 237	△ 203	△ 131	△ 72	△ 321	△ 135	△ 186	17	△ 4	21
裾野市	△ 377	△ 159	△ 218	△ 182	△ 74	△ 108	△ 197	△ 90	△ 107	2	5	△ 3
函南町	△ 40	△ 20	△ 20	△ 22	△ 13	△ 9	△ 55	△ 19	△ 36	37	12	25
清水町	△ 91	△ 35	△ 56	△ 45	△ 11	△ 34	△ 34	△ 8	△ 26	△ 12	△ 16	4
長泉町	63	△ 6	69	△ 35	△ 31	△ 4	83	18	65	15	7	8
小山町	△ 296	△ 143	△ 153	△ 77	△ 32	△ 45	△ 221	△ 116	△ 105	2	5	△ 3
静岡市	△ 775	△ 264	△ 511	△ 354	△ 156	△ 198	△ 385	△ 77	△ 308	△ 36	△ 31	△ 5



# 若年層が地方を選び「暮らし ていく」ために必要なこと

- 多くの『地方に生きる若者たち』に詳細な聞き取りをした阿部他編著(2017)を主に参考にして
  - 地方にいる理由は様々（必ずしも積極的な理由ばかりではなく、いわば仕方なくという人も多い）
  - **地方暮らしをしている若者たち（20代～30代前半）の現実はかなり厳しいものであった**
- **若者が置かれた基本的な状況とは**
  - 親と同居しているので貧困問題が目につきにくい...
  - 正規雇用・非正規雇用どちらについても年収150万程度の「ワーキングプア」層が目立つ
  - 不安定就労や低収入ゆえ結婚の見通しも立たないと...

# 先行研究の提言を参考に（１）

阿部他編著(2017)より

## • 就業機会の創出

- それぞれの規模は小さくても地域生活に根ざした雇用機会を
  - 基幹産業の他にも福祉・保健、流通、食品、建設、個人サービスなど

## • 業種・職種の多様性

- 多様な能力・専門性を発揮できる職業環境が必要
- とくに高学歴層（高スキルのキャリアを持つ層を含め）の求める仕事があるか
  - 理科系技術だけでなく文化・国際交流、福祉・保健など
  - ※大卒女子層のUターン率の低さは、サービス経済化が進展した東京圏に雇用機会が集中しているためという議論も（山口 2018）

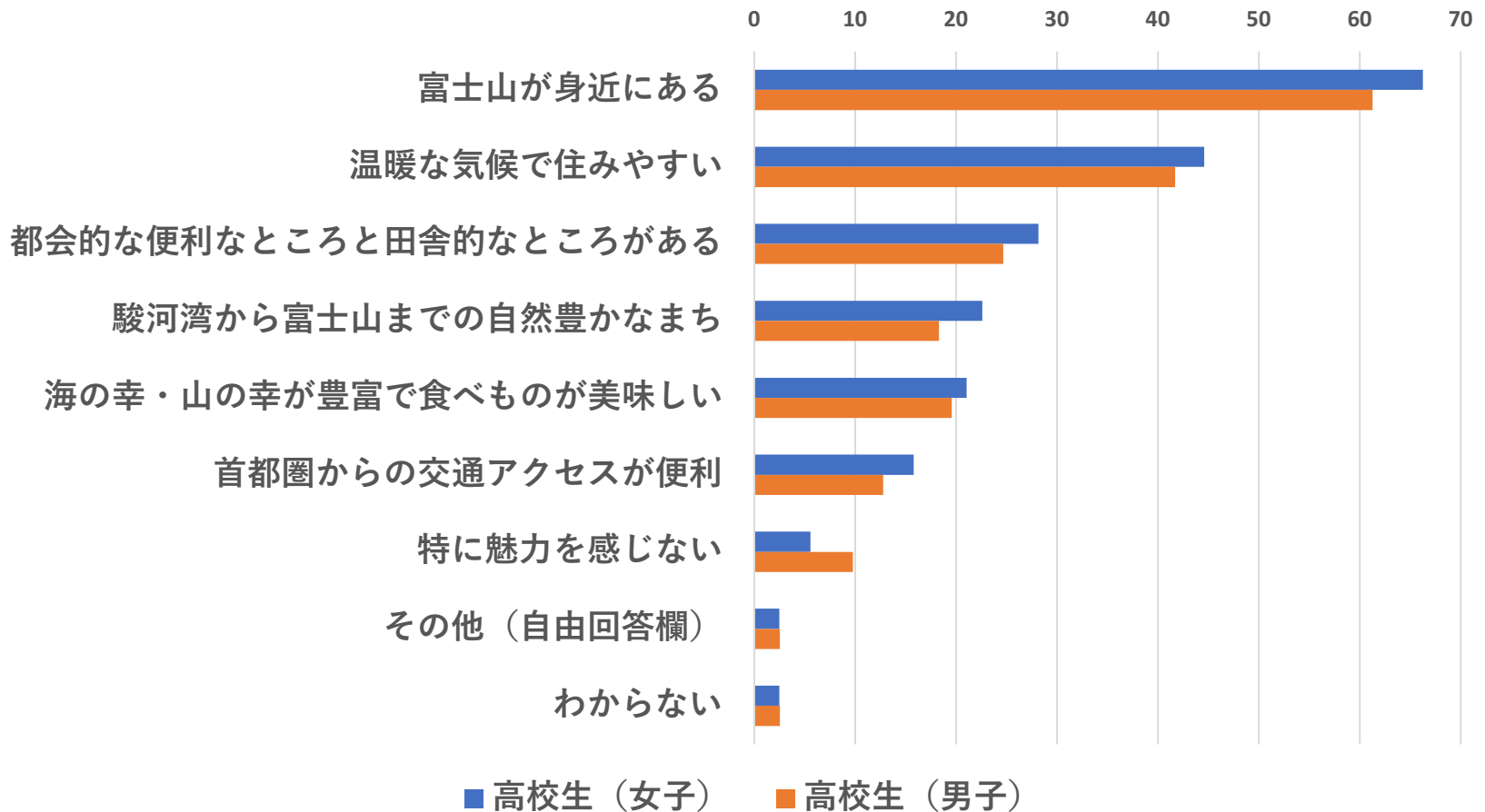
# 先行研究の提言を参考に（２）

## ・ディーセント・ワークの実現

- Decent Work 「働きがいのある人間らしい仕事」
- **賃金・労働時間・人間関係などの労働条件**に関わる
  - ※賃金など早急に変えられない問題もあるが、「**成長実感**」や「**貢献感**」といったものも**重要**であることは早期離職に関わる研究でも明らか
  - ※地方に**Uターン**した若年層には首都圏など**都市部での長時間労働・ハラスメントに嫌気がさして、ワークライフバランスを求めて**といったパターンも多い（山口2018）
    - ※なお、地方（山形）にUターンした若年層での聞き取り調査では、それによって得られた満足として「自然の豊かさ」「食べ物・水のよさ」「家族・友人らに囲まれた安心感」「子育て環境の良さ」を上げる人も多かった（山口2018）

# 富士市・PUFのアンケート調査でも自然環境などへの愛着は高いものがある

問15 富士市の魅力と感ずるところは？



# 先行研究の提言を参考に（３）

## ・ 公共部門がもつ雇用創出機能への着目

- ・ 正職員だけでなく**非常勤職員への就業ニーズ**も大
- ・ 公務労働だけでなく**公共サービスがアウトソーシング化された部分**も大きくなっている
  - ・ 医療・福祉、事務系など

## ・ 問題は財政的な制約

- ・ つねに削減圧力にさらされている
- ・ そのため**低賃金、短期・不安定雇用が顕著**
- ・ **この「ディーセント」化は重要な課題**
- ・ この部門についてはサービス供給を安価に収めるという発想だけでなく、雇用機会を創出し地域における人口増・購買力等の向上といった観点からも見直す必要があるのでは？

# 先行研究の提言を参考に（４）

## • 若年層への生活支援の重要性

- 低賃金・短期契約の若者も非常に多い時代
  - 非正規雇用についてみれば、2017年で15～24歳(女性31%, 男性23%)、25～34歳(女性39%, 男性15%)※全国, 在学者除く
- それでも「**自立**」した生活ができる**社会保障制度**を
  - 各種保険・年金制度（「典型雇用」モデルを脱する）
  - 子育て（e.g. 保育サービス）
  - 医療
  - 住宅（e.g. 公営住宅）
- このことは社会減対策だけでなく**自然減対策**にも
  - 自分なりの生活が見通せない、不安が強い
  - →結婚・出産へのハードル

# 先行研究の提言を参考に（５）

この点はとくに山口(2018)より

## ・ 企業情報の充実

- 地方都市（山形）ではとくに有名企業以外の採用情報が十分に得られないという調査対象者からの発言が多かったという
  - あるUターン者A「企業情報が少ないと思います。ただし、規模の小さいところでも魅力ある企業は結構あります。そういう企業でも知られていないところが多いのではないのでしょうか。」
  - 別のUターン者B「地元で就活といっても、どうやっていいか分かりません。県のHPなどに求人情報を掲載してくれればよいかもしれませんが...」
- ※この調査は2010年実施で、その当時よりは全体的に情報発信は改善されているはずであるが、**いかに若者にアクセスしやすい形で採用情報等を発信できるかは重要な問題**とされます

# 最後にもう一つ 地域・社会活動の潜在力へ

## • 若年層の発言力を高める

- 経済部門であれ公共部門であれ、若者の発言や活躍の機会が日常的により開かれた（それを促す）環境にしておくこと
- この点については「ジェンダーギャップ」についても十分に注意を向ける必要あり
- なぜか？
  - 年齢、性別によって活躍の機会に不公平がある
  - 異論があっても話し合いの場さえ設けられない
  - もしもこうしたことがあると、若者（とくに女性）は「街からすーっといなくなる」（朝日新聞 2021.1.7 「女性  
は戻らない」データに衝撃 反省を語る市長の挑戦より）

## • 地域・社会活動の潜在力へ

- 企画から参加し、地域の一員として発言、貢献する
- 若者がそうする日常的な地域文化を厚くしていく
- こうしたこと自体が若者の定着に結びついていくのでは



# 参考文献

- 本田由紀,2020,『教育は何を評価してきたのか』岩波新書
- 石井まこと・宮本みち子・阿部誠編著,2017,『地方に生きる若者たち：インタビューからみえてくる仕事・結婚・暮らしの未来』旬報社
- 山口泰史,2018,『若者の就職移動と居住地選択：都会志向と地元定着』古今書院
- 人口減少問題に関する有識者会議,2014,『静岡県の人口減少対策への提言』静岡県